

南の島でも、未来の話でもない。今、日本に迫る「気候危機」

河内 聰雄 (こうち あきお/ドイツ、シュトゥットガルト市在住)

“There is No Planet B!” 僕らの未来を壊すな、学校なんて行ってる場合じゃない、と毎週金曜日に学校をストライキデモを続け、9月の「グローバル気候ストライキ」では全世界で750万人以上が参加。昨年是世界中で若者たちが声を挙げ、気候変動の危機感が大きく高まった年でした。

気候正義(Climate Justice)

9月の世界一斉デモはシュトゥットガルトでもあり、約2万人の市民が参加しました。

その日の朝、バスに乗っていると、プラカードを持った小学4年生ぐらいの15人ほどの子ども達が、シュプレヒコールをあげながら乗り込んできました。引率の大人が2名いて、時間帯や様子からすると、どうやら学校の課外授業の一環のようでした。日本だと「学校に政治？持ち込むな！」と怒られそうですが、いかにもドイツですね。

子ども達は、とても勇猛な感じで、正義感に駆られて熱を帯びている様子。そんな純粋な感性を持った子ども達を眺めながら、ふと思ったのです。

正義を振りかざすことは、たとえ正しいと思われることであっても、ちょっと怖い側面もある。革命においても、純粋な市民たちが正義を振りかざし、いつの間にか暴走していったのだろう。古くはフランス革命において、アジアでは文化大革命での残忍な暴走も、初めはこういう熱からだっただのではないだろうか…。

気候変動問題は待った無しの全人類的課題。その解決を政府や企業ばかりに任せておいても埒が明かず、こうやってデモをしながら市民がプレッシャーを与え続けることは、もちろんとても重要です。

でも、人間は必ず間違える存在だと思います。その大きな過ちが気候変動問題を招いたわけですが、その過ちを正そうとする際にも、自分が正しいと思っていることすら、実はそこには絶対に正しいという答えはない、ということを理解してお

かないといけないのではないかと。そんなことを考えてしまいました。

気候非常事態(Climate Emergency)

そして迎えたCOP25、合意に至らずという報道。危機感を強める市民や科学者との意識のギャップは相当深いと実感。日本政府に至っては、COP開催期間中にも関わらず石炭火力発電継続の意向を示したようで、グレタちゃんじゃないけど、“How dare you?”(よくもまあ、できるもんだよ)。

ドイツのNGO ジャーマンウォッチが発表した「気候変動政策評価」(Climate Change Performance Index 2020)によると、日本の気候変動政策ランキングは、今回も最下位グループで61カ国中51位。さすが化石賞常連国です。

損失と被害(Loss and Damage)

注目すべきは、同時に発表された「グローバル気候リスク評価」(Global Climate Risk Index 2020)。2018年に気候変動の危険に晒され大きな被害を受けた国のランキングでは、なんと日本が第1位！気候リスクは南の島の問題ではなく、実は日本こそが気候災害に最も脆弱な国なのです。

2018年といえば、平成最悪の豪雨災害・西日本豪雨がありました。死者・行方不明者230名、被害総額1兆7000億円です。これに加えて、台風直撃(広域被害、閑空水没)、福井で記録的豪雪、埼玉・岐阜で記録的猛暑(41.0℃超)、首都圏大雪(東京で積雪20cm超)などが起こりました。

昨年は、台風19号激甚災害です。死者・行方不明者102名、全国8万棟以上の住家被害、農林水産被害だけでも3000億円。総保険請求額は1兆円超と予測。被災地に設置されたボランティアセンターは97カ所、延べ13万人以上が活動、東日本大震災に次ぐ規模です。加えて、台風15号首都圏縦断(観測史上1位の最大風速で鉄塔倒壊、93万軒停電)、九州大雨(九州南部で総雨量1,000mm超)、北で猛暑(北海道5月39.5℃、新潟・

石川・山形 8月 40℃超)。

頻発する自然災害ですが、今年は起こらないと考える方が不自然なのは明白です。

気候危機、日本こそ非常事態！

気候変動による災害は、既に日本で多発しており、気候非常事態とは他国や未来のことではなく、日本は既に非常事態だと受け止めるべきではないでしょうか。しかし、政府・産業界にはそんな認識は無く、メディア報道からも見られないのは、本当に不幸としか言いようがありません。この上さらにどれだけ失い続けるのか、想像を絶してし

まいます。まさに“茹でガエル”を体現する日本か。

ピンチをチャンスに変える

メルケル首相は新年を迎えるに際してTVで国民に向けて「温暖化の危機に、今政治が対応しないと、その影響を受けるのは子ども達や孫達。そのために、私は全エネルギーをかける。」と決意を表明。昨年、ドイツでは発電量に占める再生可能エネルギーの比率が、初めて化石燃料を逆転したそうです。政治主導力の違いの表れでしょうか？

2020年、気候危機を逆バネにして、日本が大きく変わる節目の年となりますように。



スタッフ年頭所感



明けましておめでとうございます。元旦、近くの神社に「健康と安全」を願って初詣、神社では子供連れの家族などで例年以上に賑わっていました。参拝後は近くの鵜沼海岸を散歩、広い砂浜では犬を連れた家族などが子供達と遊び、若い人々がサーフィンをする姿が楽しそうです。海岸からは、うっすらと富士山、伊豆半島や大島も望め、相模湾が光り輝いて広がっています。今年は娘家族が正月休みを利用しての旅行、息子家族はNYに住むため、妻と二人だけの静かな正月でしたが、年末から元旦にかけて娘や息子からは、旅行中や家族の動画が送られてきました。孫達も随分と成長したようです。環文出勤は月数日ですが、少しでも皆さまにお役に立ちたいと願っていますので、今年も宜しく願いいたします。(迎俊郎)

元日の朝の食卓。夫が「また自転車をやる」と宣言。競輪ではない。NHKの「こころ旅」に触発され、高齢男子が電動でなく自分でこぐ自転車に乗って回りたいということである。何度も新車を錆付かせて廃車にした前科はあるが、まあ健康的趣味とも言えるし、高速道路逆走の心配もないだろうから、せいぜい貯金してご購入いただこう。

さて私はといえば、今年こそ木版画を、と思っ

性が枯渇したらしく、ちっともその先に進まない。さしあたっての今年の目標としては、「気候マーチ」に参加して身体をはって(笑)気候危機をアピールします！(尾利出あおい)

昨年未開催の全国交流大会では「環境教育が不十分だった」との意見が出ました。これまで「人々の環境への意識が低い」という話題が出る度に、何か引っかかりを感じていましたが、この件を通じて、色々と納得。私生活でも、物事を批判的、悲観的にみる前に、要因・原因を考えてから対応を考えたいと思います。(松倉奏江)

明けましておめでとうございます。昨年は、自分と社会との関わりについて考えることが多い年でした。3年生までサークル活動に明け暮れていた私にとって、就職活動や環境文明21でのインターン、ボランティアを通して見た社会は、想像以上に複雑で深刻な課題を沢山抱えていました。

しかし一方で、微力ながらも、私のような一般市民にも社会のために出来ることがある、ということも感じています。今年から社会人になります。仕事に追われていても、常に頭のどこかで、社会に対して自分が出来ることは何だろうか、ということを考えられる社会人になりたいと思います。(吉見稔里)